

近世・歴史&文化的景観が薫る土佐清水市

—貴重な近世石造物が足摺半島を中心に点在する—

土佐清水市は、近世の歴史景観や文化景観が所々に現存し、独自の歴史風土を醸成している。これを構成する重要な要素として貴重な近代石造物の存在が欠かせない。そこで今回は、市域に点在している貴重な近世石造物の紹介をしていきたいと考える。

(1) 窪津浦・海蔵院の室戸方面鯨組寄進石造物、(2) 足摺岬・金剛福寺山門裏の山城屋寄進石造物、(3) 松尾・金比羅宮灯明台、(4) 清水浦・蓮光寺濱田家墓所と琉球水夫の墓碑など、4か所の近世石造物の紹介を以下に記載することとする。

(1) 窪津浦・海蔵院境内の鯨組石塔

窪津は、藩の鯨場（捕鯨海域）が設定され、室戸方面の浮津組・津呂組が隔年で捕鯨を独占的におこなっていた。集落の高台・神楽坂にある海蔵院（38番札所金剛福寺末寺）の境内には、鯨の供養地蔵や花崗岩製の石塔など鯨組関係者により寄進された石造物が配置されている。このような石造物は、窪津浦周辺の寺社に多く所在している。窪津沖鯨場は、天和3年（1683）から明治40年（1907）までの実に225年間にわたり捕鯨が続いた。ヘンロ道・金剛福寺道の一部である「窪津鯨道」には、室戸鯨組関係者の物と思われる墓碑が数基点在している。また、一皇子神社の手水鉢、津呂金比羅宮の一对の石灯籠も鯨組関係者が寄進したものである。



(2) 金剛福寺山門裏・山城屋寄進石灯籠

この石造物は、鯉節廻船商人山城屋親子によって寄進された物である。山城屋は、近世末から明治の初めにかけて鼻前一带（足摺半島西南部）で鯉漁・節加工・商品流通で全盛を極めた中浜浦を本拠とする廻船商人である。花崗岩製の石灯籠は、広島県尾道市で



作製させ、取り寄せた物である。天保 11 年（1840）、鼻前一带などで漁獲された鰹の水揚げは年間 50 万尾以上、土佐国全体年間漁獲量の 1/4 強に相当する（「土佐経済漁業史」）。空前の鰹漁景気を背景に全盛期は 700 人余りの従業員を抱え、所有する廻船・春日丸で江戸や上方に上質の鰹節を輸送し続けた。

この一対の石灯籠は、銘文から 3 代目山崎儀右衛門（当時・47 歳）と 4 代目山崎武平（当時・23 歳）が親子で寄進した山城屋全盛期を象徴する石造物である。

（3）松尾浦・金毘羅宮灯明台

松尾浦集落北側の山腹に高さ約 2.7m、最下段約 1.8m 四方の台座四段からなる砂岩製の灯明台が設置されている。「安政 7 年 3 月（1860）」建立の銘があり、今から 167 年前に地元廻船商人たちにより共同建立されたものである。灯明台は今で言えば灯台のような役割を持った施設であり、鰹漁の安全と豊漁を祈願して建てられた石造物である。



これらは、当時の商人たちの生きた証と、誇りを、後世に示すメルクマールである。この金毘羅宮灯明台は、昭和 47 年 4 月 30 日に土佐清水市指定文化財に登録された。

（4）蓮光寺墓地内の清水浦庄屋・濱田家墓所と琉球水夫の墓

濱田家は代々、本清水（現在の元町と天神町一带）を取り仕切る大庄屋だった。この濱田一族の歴代当主の名は、近世・清水の歴史に度々登場する。宝永 2 年（1705）、琉球船が清水浦に漂着した。このとき、大通事などの幹部の宿泊所に充てられたのが、当時の清水浦庄屋・濱田五右衛門の屋敷だった。この滞在期間中に琉球水夫が一人病死している。その墓（水成岩製の三日月形の墓石）が、この濱田家墓所の一隅に安置されて手厚く供養されてきた。また、中浜万次郎が慶応 2 年（1866）3 月 25 日、高知城下に招聘されたとき、当時の清水浦庄屋・濱田耶八十右衛門方を訪問し、選別の杯を受けている。



↑ 蓮光寺境内に所在する濱田家墓所(左)と琉球水夫の墓石(右)